

**Kodak**

LICENSED PRODUCT  
Black

3/Color

**KODAK Color Control Patches** © The Titlen Company, 2000

0

1

2

3

4

5

6

M

7

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

19

Centimetres



卷之三

同上

光三十一年

西漢楊萬里詩集

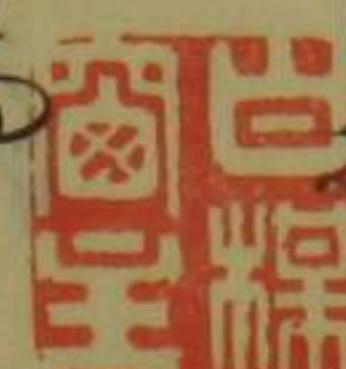
卷之三

1272  
1278

河海拾卷第十八

才三十總角

正六位上物語博士源雅良撰



冬至わすぬよつと笑といとく、ゑんや  
みやうかく、いふみりてあててもつるよた  
名杏東引<sup>キアリ</sup>、机室角<sup>カタツル</sup>、結<sup>ハシ</sup>、縫<sup>スル</sup>也

そぞり

ひくひくるもひき  
とどうこううんとおもひをもくしゆうすゑりよ  
正<sup>マサニ</sup>の<sup>ミ</sup>とどくとくまわふじくらうとくはふ  
集<sup>シテ</sup>本<sup>シテ</sup>前附<sup>シテ</sup>  
色人り<sup>シテ</sup>くわくはくとくやさうとく人

今ハシムテヒタリリハシマセシトシハシ  
シテクシハシムテアリハシムリハシムクシハシ  
セシトシモルヒトシトシ

シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ  
シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ

シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ

シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ  
シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ  
シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ  
取支人女ナヘシ義 藤相云并高音家冲也慰  
小當女故稱其也

物トシトシモルヒトシトシトシトシトシ

シハシモルヒトシトシモルヒトシトシトシ

總角日記舉卷 繼之集

事蹟と題

袖乃文とひきやもぬとて

たくひの時へ鳴そりひ人の袖をもひとゆる

秋乃木とひはくわんとあひとよみ

かめうてひりとよみ

邊風吹れ心端瀧水流拂和波り後宮

ああよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

じりとててゆうとたまの御うてありやうう

しらすらぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

晨鶴再鳴殊月後征馬速嘶行人お

白氏文集

きんとすとすとすとすとすとすとすと

鳥の音とさよとさよとさよと世の紀事いふと

まちがえとさよとさよと人三三に

わせとさよとさよとさよ

かくてと初せの音とさよと空のわねや

わすれとさよとさよとひるの

音とさよとさよとさよと

安久方ちや止ゆとお若波か利也七字

左か利と秋田礼止毛方昌以安波か利止字

かよ利あは分り止字と舉夫禮也樂人矣

公人部

男や初會合を正丸月と

合をうれや

私向てこのつるを外すと切らんとあひをいひ  
とくをわらひあらかうもとおもとびとおせうれ  
高麗  
あせりんじゆきとひのむとあらはおどりのよをせ

えゆられぬこと

不動

ひき代れりとくまんむらうさう  
せ中とくとくしててばよめとくさんとく

ちうしよ 顯祕

くらゆとくわゆとはくにゆりあわせ  
くわひととんとくわくとくもくせり

仙人 雲霞 る 雲霞 の 雲霞 文遙

雲是准也もくつろひ人也

東海

菟詠

かうゆえと林てつゝとすけくもんと  
徳田守松人の中ゆる林とあしゆる文向見  
志林事候室に豫るスミニテ シカク シカク シカク  
志神山國と領して雲大内かでうべく 五月蠅  
志こはくうとくはくうとくはくうとくはく  
ちくと背也ア此志林といを貴林鳴鳴御也

けくらとく

歯透

あふ人あくわわくへん秋乃もかへと  
をがくとも思もせぬ音わ人々の林のよをく  
かのう代えもくとくもくとくもくとくもく

蟋蟀居壁 月令

遶壁晴坐

限憲

巢寒

鶩未絶

樂

方をもるるにあらんこらしとか

歌ふかよどことてまく海舟もまくに

しわのへくわくうくにほと

進心

日本

物をもるるにあらんこらしとか

たすくもむくまくまくまくまくまくまく

いきく云ふ

とる

物をもるるにあらんこらしとか

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

きくわくわくわくわくわくわくわくわく

松圓

勵之

ひくひくひくひく

わくわくわくわくわくわくわくわくわく

又尾と尾と尾と尾と

はくはくはくはくはくはくはくはく

み色かまのくぬ

中傳ある袴也

こくくくくやくまよ

難役

物をもるるにあらんこらしとか

ひくひくひくひくひくひくひくひく

はくちやわが里にしづかあらとまほじらり  
船をもとよしとせんとせんゆる

おだはるの御詠

おとし舟へとよめと入れし浪  
せ中と行きたとぞ船りきとお行水とく  
うち山りいとくとせんとくとくとくとく  
寛永版上巻 おとし舟へとよめと入れし浪  
ア死すこみれ

寄亭

ほのうと林やとよめとけつはうれ  
景やよめとよめとけつはうれ  
みやうれとよめとよめとけつはうれ

仰懐惟 磬代

そようくよめとよめとけつはうれ

かまくとよめとよめとけつはうれ

海仙樂 又海鳥樂 黃鐘調

えいあんのうせんのう

のよきうりうみうみうみうみうみうみ

官吏

内石 中文をせ

あゆみをよしとよしとよしとよしとよし

よしとよしとよしとよしとよしとよし

六九 貫く  
久ら葉乃よせてとゆあひの處をゆうて

いそに

貫く

たるやの紅葉ありてて宵に歸りみゆく  
ふとかこゑよつゝとよしと紅葉入る所と  
はるかの夜すくもとて人やとみゆく  
て人やとみゆく絶景ありゆけぐくことか  
こえきくらうさあひりとてえんをへそりて  
人やしどんこつひめうとそ  
ままでねえりのとくふすくじとひくわやうらを  
任堪也源吉男へりくめにうなびとく  
くわきねよあよほりとくまと人やしどう事と云  
やさしくちあせ

初までゆくうくきをうううめぐらすもるれ

冬小事任堪也源吉不覺在人和物と  
うううとてとつひうひうこくもくわく

翁也可せ

とれすくのとくとくとくとくとくのとく

備

たうらの生れいこううく秋のやうのやう

ゆくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
九華長源<sub>トシ</sub>和<sub>トシ</sub>反魂<sub>トシ</sub>も<sub>トシ</sub>人魂<sub>トシ</sub>史人<sub>トシ</sub>魂

在何许

毛櫛門<sub>トシ</sub>河<sub>トシ</sub>焚<sub>トシ</sub>毛<sub>トシ</sub>

白氏文集

李丈人<sub>トシ</sub>游ての後漢武帝本泉殿<sub>トシ</sub>裏よ  
は魚と馬して方ちとて墨葉と合<sub>トシ</sub>  
金炉水使<sub>トシ</sub>かも火爐の中は夫人<sub>トシ</sub>あひ

事也

わくとくのせれことよまきつて

リ

わどもくの御事こうひくわあをか今モ斯ル  
たゞうだこいのちよしも

おもはやまつてと絶るもももも情之令も  
か袖をけりすとふちことひもせりと  
任すへとしもすとあもか袖をけりめうり  
みゆいくとれひけりむれりうり被  
鑑鑑もこのみの芦もと母さうあら木の木あらは  
あさりも太古よりく

くはく

切符もたり

こづれ

近常

諸卿々入六人六人とくまく比念はくはく

西涼改の会ひとくらす

常不將とくんに後此をかく了身約取

秋深故汝等不放慢

而以志何汝等皆約

善達通當得優佛

法範汝不接

釋毛圓汝不憚

其てし實家へ借と唱

てて言と礼深

也一切衆生以體ある事よ

不義行す

ゆく

宿くせ

やたうそく

礼拜の事也ぬけたゞ

回向

とよりありてすまう

豊明齋會

きへやう

よもとと例下<sup>スル</sup>遠例<sup>スル</sup>亦かに<sup>シ</sup>也

わともととくはらる

伊藤也所りて<sup>シテ</sup>やもと是もととく<sup>シテ</sup>也  
のれ<sup>シテ</sup>のあく<sup>シテ</sup>して<sup>シテ</sup>みるもとくちり<sup>シテ</sup>  
うたきかとろくとくもとくほん

不<sup>シ</sup>ふるとまく一<sup>シテ</sup>

參奉也

せうつろひはくに<sup>シテ</sup>うりこあく<sup>シテ</sup>くにゆくと  
れゆく<sup>シテ</sup>くにゆく

蒸人將ゆ<sup>シテ</sup>えとそく<sup>シテ</sup>旅番<sup>ヨシムサ</sup>よ<sup>シムサ</sup>よ<sup>シ</sup>た

けく<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>われ因<sup>ノ</sup>行<sup>カ</sup>ス<sup>シテ</sup>よ<sup>シムサ</sup>よ<sup>シムサ</sup>

お<sup>シ</sup>く<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>くにゆく<sup>シテ</sup>せ

うれ人のとくゆ<sup>シテ</sup>まく<sup>シテ</sup>不<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>とく月<sup>ヨウ</sup>

く<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>もとと

活<sup>カ</sup>納<sup>カ</sup>松<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>物<sup>ト</sup>く<sup>シ</sup>次<sup>ノ</sup>月

うれれ<sup>カ</sup>ちあ<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>極<sup>シ</sup>也

じしきて<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>放<sup>リ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>放<sup>リ</sup>く<sup>シテ</sup>を<sup>シテ</sup>

く<sup>シテ</sup>かく<sup>シテ</sup>かく<sup>シテ</sup>と

捨<sup>タ</sup>

遺<sup>ハ</sup>變<sup>ハ</sup>淨<sup>ハ</sup>普<sup>ハ</sup>總<sup>モ</sup>捨<sup>タ</sup>室<sup>モ</sup>捨<sup>タ</sup>廣<sup>モ</sup>舍<sup>タ</sup>希<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>

ひ<sup>シ</sup>て<sup>シテ</sup>入<sup>カ</sup>ひのひの<sup>シテ</sup>放<sup>リ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>書<sup>カ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>也<sup>シ</sup>  
立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>書<sup>カ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>也<sup>シ</sup>  
立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>書<sup>カ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>也<sup>シ</sup>  
や<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>立<sup>シテ</sup>て<sup>シテ</sup>書<sup>カ</sup>く<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>也<sup>シ</sup>

後乃尊者乞生滅法生滅已。承滅の承<sub>涅槃經</sub>

雪山童子來有十丈和及次半偈先說復

國<sub>日之子</sub>以來半偈曰飢不<sub>破</sub>說向食何血肉童子

而汝乃捨全半伴因中也和及半偈釋也

中阿含經涅槃經說同略

月光人は以れ思ふ事かと申すが事かと申す

かと申すが事かと申すが事かと申す

化のやめと申すも

うのけことわざと申すも

はまくの角をと

いわゆるシノボリと申すも

第31 早蕨

卷石

早蕨はよみんぐに今ひそむはう蕨とぞ

蕨<sub>朝</sub>わら松はまくわらとぞち

日光<sub>火</sub>やゆきのつそれもあらに火に新とゆ

生<sub>火</sub>鹽<sub>火</sub>脚故名<sub>火</sub>

蕨<sub>火</sub>各別物欲周至せとつる御<sub>火</sub>和國通用欲

ト

ト、あらまくはよみんぐ人のかみよはう蕨のうい

ト

蕨毛詩蕨月鹽<sub>火</sub>土革

車木疏<sub>火</sub>周秦曰蕨齊魯曰鹽<sub>火</sub>俗云其初

生<sub>火</sub>鹽<sub>火</sub>脚故名<sub>火</sub>

蕨<sub>火</sub>各別物欲周至せとつる御<sub>火</sub>和國通用欲

ト

ゆきと人をもよそひのとくわざり  
れどあてもこけやもあれこたよ／＼  
まつやのやあをうしうりて  
いもゆきくらべくちうりてはとのうだり  
ほりえとみよしんとくすのりはるト  
かねてくせのねうふもととくわづまき  
葉えじも尋ねよひくよれくよ  
壹くわよひちくわよとゆづく事とく  
マヌヨ宿てりよとくをむると  
めうとづくせをもれキタクシテマツ  
油くとくわゆみあくもんと

伏見在大和國日本紀云安康五年崩落原貸

新井後葉

とよもよは室のあ徒わかくい人の沙地よ  
わくらすとひにすこ今みくらはる  
とゆまとま行ゆせば寄の大和國とう  
ナカセがこのれ人のよう是と年可とて  
を伏見とくふせ

スノハシトモハトとくことよひやは  
玉喜とみとくとくのるハ紀すとくもする  
いのこよめ原よとてつるうう

常世日午化 蓮葉

御輪もとしつてあふれきなきとこにうすり  
限もとへまつてはくまつてうわの波  
みくもあくらせとく

除服事也河原やくを除してわんじえ

服三月（シマツル）の事あれぬとて年を全  
又母の服（シマツル）をいふやうとて胸<sup>（マツル）</sup>を包む  
さくらとあくま也

けのえにゆかとおこすあはれの胸<sup>（マツル）</sup>を包むやう  
とむりてねど

もむかと胸<sup>（マツル）</sup>の内（シタ）をかわら御<sup>（マサニ）</sup>事無<sup>（ムカシ）</sup>を  
いう宮<sup>（ミヤコ）</sup>がよそをほんとおもとてみつてうらやま

故婦君<sup>（コノヒメコネ）</sup>也

金<sup>（カネ）</sup>と紙<sup>（シナガ）</sup>とこなよんやくゆと

今<sup>（キモチ）</sup>が本<sup>（ホン）</sup>年<sup>（イリ）</sup>の事<sup>（モノ）</sup>をやと金<sup>（カネ）</sup>と人<sup>（ヒト）</sup>とそぞろ  
ひかやとひかへとすまわる様又<sup>（ヨリ）</sup>御<sup>（マサニ）</sup>とすま

ましのうとくのぬごう

月<sup>（ツキ）</sup>をかのまきとせきの

ちひづく所<sup>（レバ）</sup>はりう

五月<sup>（シマツル）</sup>の朝<sup>（アサヒ）</sup>とひの若<sup>（ヒロシ）</sup>人の袖<sup>（マツル）</sup>をと

袖<sup>（マツル）</sup>の梅<sup>（シマツル）</sup>がもと白<sup>（シロ）</sup>と袖<sup>（マツル）</sup>のうす年<sup>（イリ）</sup>をかわら  
かわらうに故<sup>（コノ）</sup>うれとおもひの袖<sup>（マツル）</sup>のゆの聲<sup>（シテ）</sup>をま

まよふくのゆのちのち

わくこだりとみゆの袖<sup>（マツル）</sup>をよもよもとむじを  
わくともとくすもあんれいめいもふとむじ

きゆくのせんせんひのひじるも

人<sup>（ヒト）</sup>の秋<sup>（オトコ）</sup>のひのひくもあせとくもくげ

むひひり

因繆（ヨウミ） 又寄庵（ヨウテイテ） 文選又因<sup>（ヨウ）</sup>白文集又賜<sup>（シテ）</sup>胸<sup>（マツル）</sup>を

もてう色<sup>（シナ）</sup>じうとむとくせよとくの

かた

人ハ氣アヒ花カをさだらひう袖スリへ

仕シりうだにあわまふ

後アヒ花カを

か

かく衣アヒ綱カは

ひくひくとひくひくとひくひくと

年カは

一

もよろこびうるのを石城やくす用の原白氏文集、  
湖光寺をも附本歌も葉よもよてらわむとば

河をもうりてうへ候海う

式又詠はよから塔と碑てうるこりせよ

よきよきありま

腐也

二重院の橋とみゆきゆめよみゆきとすはぢ  
やうれいのくらとくやすとむりうちあくち  
よみゆきよみゆきよみゆきよみゆきよみゆき  
よみゆきよみゆきよみゆきよみゆきよみゆき  
よみゆきよみゆきよみゆきよみゆきよみゆき

實

序三十二 宿本

卷名

一名魚鳥

かくう木とみゆきとみゆきとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆきとみゆきとみゆき  
とみゆきとみゆきとみゆきとみゆきとみゆき

銷日不如其石

延喜七年正月朔記

朝親

年

大原山口還山の兼稟宣

園基わ然わるね馬則召基高式之根主与久大  
基其間は既別當去野率鹿毛れ馬立延喜

局給大馬勝

いしにたり物

賭カケモノ

ありふりへ思ひしと  
伊勢物語しへえのうつせうづれも  
奥傳やくとくわがまにまわん水りあらむれ  
けとくわがまにまわん水りあらむれ  
口うらじまよはまくわり  
反魂鳥 あわ

くこくはいふあらむ

卷之二十一

人乃そとけやる  
毛とめりを  
かねくわうへこらへる  
みてとくせうづく  
みへくとくふとく  
くとくとくとく

ちふぬうとうとくせよとく  
奥壁ヨリ及シテ在リ縁ヨリ改ハシメ蓋カバ而不悟  
注曰朝菌者世謂之木茎或謂之日逐文選歌也  
日及ハあくふの若也

まくはく  
二象院アマニ三障宮ミヤウラ小方院コウノウすり  
いわと見てゆうのか従スル事

わ西の女房の居候と云ふ方をさう大方なり  
もひ故也直の方さうぞ内家内房をとまは  
うちかへる事といたりしてゆくとけこと

よ君結婚傳寫縁附女謹アマニ

古物

仁義與妻丈壽と云ふ也仁義尼奥入水東下  
一同來えこれに半太力因也女のこゝわしてけ  
女のくらつてあらとれ頑の事ある次  
可起付

越の山中を月と見ゆる所

里のあそび人うらに宿すと歸て被のの  
後ひうき冷くから二三年からとよせしむ

一、此院ゆも六乗院下とも

六條院道也おの事け御はるやく院

桂院又稱度也歟

ウタヒトサカアリハシ

毛詩云小堂裁壹草絃云憂

うれよ壹草と云草と云也仁義尼八思  
くも此莫せまに秋絃とけまくと憂て絃

せんじくも人づくと

山里のれいと云ふ事と云ふ事と云ひて  
仁義尼下てもうか桂院か

ソラモトアリと

あるソラモトアリと云ふ事と云ひて  
人とうふれふ人桂院

遊仙客

内家内房と云ふ月をめぐら

秋のまことにすとてより月で  
立冬のまことにすとてむかひ  
家をもよみりるわざまれてかわに立春  
月立冬のまことにすとて  
後摺才たと月とうとわざとす  
や人のわらきく徒人不知  
秋殺の候に對木立月あはれいとる  
わらうる年ぬり候うらむをもつて  
さばうるとよすともの候りくに  
うしゆめをとすとおもゆりくに  
おとふとそわわらくぬちる  
つるととじゆくととじゆくととじゆく  
わゆりうるえに下よがえうと被うらむ  
うるととじゆくととじゆくととじゆく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
わゆりうるえに下よがえうと被うらむ  
わゆりうるえに下よがえうと被うらむ  
わゆりうるえに下よがえうと被うらむ

人のものかのうへるにあれば  
せがひだりやうむをもとを  
せやへれど金の財はまゐるもじとしまつて  
もゆゑもゆゑとゆゑてゆゑ

やうえとゆゑゆゑゆゑゆゑ  
かやとゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ

ゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ  
ゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ

きんねんへとゆゑゆゑゆゑ  
か色とくゆゑゆゑゆゑ

後悔せ

れ定まへてくらむとくらむくのまく  
おとすかはめゆゑゆゑゆゑゆゑ  
とくらむくらむくらむくらむく  
じくらむくらむくらむくらむく

おのまくらむくらむく

後悔せ

あいせよゆゑゆゑゆゑ

接達

ち鳥八重のとくらむくらむくらむく

それもゆゑゆゑゆゑゆゑ

えをせの思ふゆゑゆゑゆゑゆゑ

ゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ

あいせよゆゑゆゑゆゑ

おとすかはめゆゑゆゑゆゑ

をくらむくらむくらむく

おとすかはめゆゑゆゑ

じゆゑゆゑゆゑゆゑゆゑ

こちゆゑゆゑ

白氏文集曰、李公峯北有寺号遺愛寺、傳曰  
高宗皇帝有忽薨、不堪哀傷、建立堂舍  
王子於安昌其寺草堂記、嘗畫馬車漢武帝初喪  
李丈人李泉駿、令寫真丹青、空有竟何益  
不言不失愁效君

刻歌刻事、武帝以童仲君李丈人血作以溫石  
あくにするはれひよえうてんじらうこもゆる  
ゑそとくそくそくじよせうじにむけはくすく  
ひゆりしむらももくうみゆくうじゆのくわ  
毛銃子と以人を照看へりとゑよかうじゆ

金とくくくはくはくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくらしと金とえをとくわくやうをゆくとく

地歎世よ死よをゆくゆくゆくゆくゆくゆく

じとへとくれんよくようりせんのふれまとく

じとへとくれんよくようりせんのふれまとく

じとへとくれんよくようりせんのふれまとく

じとへとくれんよくようりせんのふれまとく

又豪求曰、虛上一下東極、絕天海、跨蓬萊、見方  
高仙山、多橋、周西廂下有洞、東嚮、函其門  
署曰玉妃太真院長恨詩

やくじよああくらんむとくめくめくりくわくく  
こくわくくわくくわくくわくくわくくわくく

口輕

かわく

くわくくわくくわくくわくくわくくわくくわくく

65

かせうにいもすれりよ  
行うわう徒徒そとふくらう神の  
じうへ人のめあふれとゆわよもうちうけうけよん  
とゆれうるんこもがうようかわく

比空衆人何處看憶昨平陽宅初墨吞併平  
人末家地仙ち双トテ作梵宮御恩人家畫る

寺兩朱同判佛寺寢多也

白氏文集

じうわう徒とくうくかくとけえとあくえ  
本傳記云銀青膠公同佐乎ノのすとせうゆうく  
絶母へやうみえうれうれうせやかのとく  
アリかやくはわよ仏通入うれ絶父おうよ  
印うれもらもとつうねう

### 梵通

小鳥乃ちせ

磨博士推古天皇十二年甲子正月戊午歲曆日  
ムヒヒのひれねかくごくくのとくねどくニ  
イモハシルモトクニシマシ

### 梵通

アラハマサキハタのうとうすくやくやまねえ  
長もみよまほりひうとりもあくとてたつ  
ミハシトクシカシマシマシ

又蝴蝶のうきう

年うえとふくとこくの旅宿といよをもあ

寄生

るのわくうりみぬくいゆく

(5)

かくらふるるのれんもれしハ  
かくへまをやうじしハ  
い前くいとくわふたとゆハ

日引と川口とて

やくさんてうそほの今後はうてはよと恨つて  
死の申よと色小どくゆくよへみとれ  
うてあらゆへうりより色も人ひありてひとて  
とへまくハ

不<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>花十海變<sup>スル</sup>夷<sup>アマ</sup>也用後更<sup>タリ</sup>元禎  
西宮左大臣庭前高楊陵居樹上院前小院詠  
比翁教作者之年壹<sup>シテ</sup>字<sup>シテ</sup>毛<sup>モ</sup>詠既超授秘年  
曲<sup>シテ</sup>更<sup>タリ</sup>醒<sup>アラカニ</sup>、庶<sup>シテ</sup>華武<sup>アマハ</sup>也校上元石上流采

又天人比<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>ゆく<sup>シテ</sup>の寢<sup>スル</sup>天<sup>スル</sup>也<sup>シテ</sup>り

伊勢乃<sup>シテ</sup>中天<sup>シテ</sup>とつゆ

伊勢乃<sup>シテ</sup>中天<sup>シテ</sup>とつゆ

之保かち<sup>シテ</sup>余名<sup>シテ</sup>大利害<sup>シテ</sup>川未<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>か

以<sup>シテ</sup>は右<sup>シテ</sup>あ<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>多<sup>シ</sup>東<sup>シテ</sup>也<sup>シテ</sup>は右<sup>シテ</sup>彼<sup>シテ</sup>

年<sup>シテ</sup>や<sup>シテ</sup>伊勢海

はくも<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>他<sup>シテ</sup>物<sup>シテ</sup>

也<sup>シテ</sup>物<sup>シテ</sup>

縣石式<sup>シテ</sup>家官<sup>シテ</sup>除<sup>シテ</sup>國<sup>シテ</sup>以<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>革<sup>シテ</sup>也<sup>シテ</sup>行<sup>シテ</sup>不<sup>シテ</sup>清<sup>シテ</sup>

以<sup>シテ</sup>後<sup>シテ</sup>も<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>經<sup>シテ</sup>也<sup>シテ</sup>先<sup>シテ</sup>發<sup>シテ</sup>清<sup>シテ</sup>參<sup>シテ</sup>奉<sup>シテ</sup>本<sup>シテ</sup>事<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>言<sup>シテ</sup>

少<sup>シテ</sup>よ<sup>シテ</sup>也<sup>シテ</sup>うれ<sup>シテ</sup>うれ<sup>シテ</sup>と<sup>シテ</sup>ト<sup>シテ</sup>云<sup>シテ</sup>け<sup>シテ</sup>説<sup>シテ</sup>か<sup>シテ</sup>せ

卷之三

### 大廕食

國菴が御秋り年

又百人太わく、十人十人、八十人入て、内せめらも、  
内れに色入はる、のむのせらと、入からむのせらと  
し別きうへとれわく、とんと

天嘉二年四立月八日自中宮給產餉息而

武帝衛宣女牧而才敷木用蟬翼有銀荀著上例

上海臺具如例有男女房卿食各用朱臺之盤並給食

十具皇子卽衣十襲立具唐後

立具平絹

純立具幼除打擣合墨

中取二腳九章石至相起

立具平絹

純立具幼除打擣合墨

饌息而才膳衛宣大前經而才敷有銀荀著上例

清又有酒臺具一具又軟玉之粉七前每布繪十敷粉蓋

年五十貫能食立具冷泉以誕生訖也

它柔粉曰石通對奉甚若年錄

盛丸立初而石使晨列五高杯官人取立馬傍祈後

副令停四依例或有國菴具いの本府傳

而次く下つを以つて

粉淡

速

宮ノミシテムハノモナリル日からヘトリシケル  
ノ位也

六十日或百日代餅事也

天正四年八月五日能宮降誕之後當百日依世俗  
例供代餅朱門臺六臺一臺御已筋軋有木下經上銀器二盤基唐ノ莫子八絆二基餅八堆一基木口徑八成年九条記

代餅は毎日以てよりよしとての事也アリテ  
サツツヘの袖ノクタメ梅ノ花ありモヤニシ事也  
セラシトシル事也

節句八月節也

ノヨリ死ノ名ノ聲ニシテ

祭事も含藤元官事

延喜二年三月廿日卯記曰、日辰火也、奇吉奇  
死ト有新也、辛、大昌秋物、穀、根粉卯贊  
て為作新息也、宜有別也、而後列坐、有火不盡  
酒教巡後、乃大昌作石人將乞新、延日、奇吉  
藤元和奇則、大昌作石人將乞新、延日、奇吉  
横笛和琴、其横笛和琴、和送物、り酒、盡同  
舉郡長齋前、管絃、舞、年紀石教同觀王、後  
前、从忠房、去吹笛、覽給服郡、名有元

えんの二卷

琴之謡立卷

難琴之謡百廿卷

見在書目六

右村農子本

レ・之の爲めに食す事

銀楊器 式藥器 祀祭器

御食器の如きは、その如きに減る

進食 日本紀才七葉と若禱唯事歟

レ・之の如きは、その如きに減る

漢書云女子云、後曰、淳曰云、羊也、向天子嫁が法  
復必使後、後同姓を<sup>アリ</sup>故謂之云、有官表列  
後可食曰、國皇后云、而食曰邑帝婦婦曰長云、  
正三位源朝臣、潔者、曉諭天皇云、女也、正三位  
選舉未得其人、太政大臣正三位原朝臣良房初  
系之時、天皇曰、其風操超倫殊勲也、

之を仰て、女ノノ、御之、清り

不禮

レ・之の如きは、やうやく

かくの如き

牙一とつら歎二の如きあるよ思ひ、とく

レ・之の如きは、やうやく、かくの如きは、やうやく、

正も含焉、宴、延長御事

かくて、もううんちくは、かくの如きは、やうやく、

藤よお威者代号あり。

レ・之の如きは、

案、金とを、ゆうすの如き、御、宿、多、加、し、

かくて、ゆくかよかく、も、うき、ひ、かく、い、ゆく、

レ・之の如きは、かうあせわろニ

庇御車

乞毛 金造 槍柄毛 納代

之の如きは、かうあせわろニ

無外處處是人情事の爲めの爲めに  
やくこととせへり

至り角ニシテ

角乃

良見とくとあせ

わざり色づてこしらこ

看苗文

注とふれあはれむる

泉川

通とすせ景林天官教安山川と中にはある  
逃戦ありしゆせ

かげてすみれゑつて川をさうをよ

遙舟子ワキ文邊才二

毛樂さむと退

人毛一介わすり 沐浴取

ありといこす 玉廟

ゆうらのすくら神くしふるてくわいむん

取金釵銅合各折其半授使者曰爲致謝太上宣

謹教是物即而ね也 長恨手附

かくうれ教毛すくらすくらとすくらとすくら

かくうれ教毛すくらすくらとすくらとすくら

毛詩曰流離之日自知老矣

山故集鳥へ一ひとよもとひそせ

或疏云杜若とかく毛とすくらとすくらとすくら

又八重村云ひては、春日山の御神體が、此處に祀られ  
る事から、此を神と祀つて御守りをもつてゐる  
事である。源氏物語よりあり是ちもく御定  
め但定家で不都合と又相之只うはくま。

鳥居東坂

